

日本ハーディ協会第69回大会

日時 2026年10月31日（土）11：10～17：40
場所 千葉工業大学 津田沼キャンパス 6号館4階3番
〒275-0016千葉県習志野市津田沼2-17-1
会場教室 643教室
電話 047-475-2111 大学HP <https://chibatech.jp/about/institute/access/>

開会の辞	(11：10)	総合司会	日本ハーディ協会庶務委員長 東京都立大学教授	亀澤 美由紀
研究発表	(11：15～11：50)	司会	白鷗大学 准教授	唐戸 信嘉
	ハーディは建築図面から何を学んだのか		日本大学准教授	杉本 宏昭
昼食休憩	(11：50～12：55)			
総会	(12：55～13：25)	司会	日本ハーディ協会事務局長 名古屋学院大学教授	西村 美保
	○会計報告 ○編集委員会報告（会報・協会ニュース）○役員改選 ○次期大会について ○その他			
シンポジウム	(13：35～15：50)			
	ハーディとジェイムズにおける変容の諸相 ——怪奇小説、新しい女、プロフェッショナルリズム、創作作法			
	司会	西南学院大学名誉教授	金子 幸男	
	講師	金沢大学准教授	宮澤 優樹	
	講師	日本大学准教授	松浦 恵美	
	講師	阪南大学教授	杉村 醇子	
	講師	大阪成蹊大学准教授	麻島 徳子	
特別講演	(16：00～17：20)	司会	日本女子大学教授	坂田 薫子
	人の家を見に行く習慣			
	講師	東京大学教授	新井 潤美	
閉会の辞	(17：30)	日本ハーディ協会会長・西南学院大学名誉教授	金子 幸男	
懇親会	別途ご案内いたします。			

- ※ 受付は10時30分から開始します。懇親会に参加される方は、受付の際に懇親会費をお支払い下さい。なお受付では年会費の徴収は行っておりません。
- ※ 学内の食堂利用可(現在のところ)、また駅前にキャンパスがありますので、駅周辺にコンビニ、ファストフード、レストランが多数あります。
- ※ 会場内での飲食は可能です。また、会場1階の講師控室をご利用いただくことも可能です。
- ※ ゴミの処分は基本的に各自でお願いしますが、廊下にゴミ箱が設置されていますので、必要に応じて、ご利用ください。
- ※ 新型コロナウイルス感染症の拡大状況およびその他やむを得ぬ事情によっては、リモート開催に変更させていただきます場合もございます。
- ※ 大会への出欠確認については、別途ご案内いたします。非会員で当日参加希望の方は、あらかじめ下記の日本ハーディ協会事務局までご連絡ください。
- ※ 当日は、密にならないよう十分に広い会場で行います。発熱や咳、倦怠感などの症状がある場合は参加をお控えください。

問い合わせ先： 日本ハーディ協会事務局
〒456-8612 名古屋市熱田区熱田西町1-25 名古屋学院大学外国語学部 西村美保研究室内
メールアドレス： jimu.thsjapan@gmail.com

主催
後援

日本ハーディ協会
千葉工業大学



アクセスマップ



② 投資家側では、株の購入時期の選定が重要であり、買値が安ければ、買値の差が利益となる。

《研究発表概要》

ハーディは建築図面から何を学んだのか

杉本 宏昭

ハーディと建築を考察する場合ゴシック建築の議論が中心となることが多いが、今回は建築図面に焦点を当て、ハーディが図面から何を学び、それがどのようにハーディの芸術観に影響を及ぼしているかを考察する。

ハーディは、小説を書く前、建築家見習いまたアシスタントとして建築図面に触れた可能性が大いにある。しかし、ハーディが残した建築図面またスケッチなどの資料において利用できるものが実際のところ数少ないことが原因であると思われるが、ハーディと建築図面に関する分野の研究はまだ進んでいない。今回は建築図面を perspective の視点からその歴史を概観し、ハーディが‘draughtsman’として置かれた状況を推定するとともに、スケッチや絵画も考察しつつ、ハーディが建築図面から学んだものが自身の芸術観、特に反リアリズムの姿勢、にどのように反映されているかを考察する。

《シンポジウム概要》

ハーディとジェイムズにおける変容の諸相

——怪奇小説、新しい女、プロフェッショナリズム、 創作作法

はじめに

金子 幸男

今回のシンポジウムは、日本ヘンリー・ジェイムズ協会からお二人をお招きして行うことになった。ヘンリー・ジェイムズ（1843-1916）とトマス・ハーディ（1840-1928）を並べてみると、生没年がほぼ重なっていることが分かり、同じ時代の空気を呼吸していたことが分かる。ジェイムズはアメリカのニューヨークの裕福な家庭に生まれ、哲学者である父の自由を大切にせる教育を受け、イングランド、フランス、スイス、ドイツなどを若いころから家族で旅行し、知識と教養を身につけた。若き日から作家をめざし、1880年代初期にイギリスに定住、ロンドンを基点にして数々の作品を生み出し、死の直前にイギリスに帰化した。ハーディのほうはイングランド南西部ドーチェスター界隈の田舎に石工の頭領の息子として生まれたので労働者階級に属する。専門職である建築家になった後、小説家に転身し、イングランド南西部にウェセックスという地名を与えて数々の小説を書いた後、詩人としても多くの作品を残す。社交界の季節は田舎を離れてロンドンで過ごすことが常であったハーディはジェイムズとは1880年代初めから知

り合いになり、ロンドンのクラブや共通の友人エドモンド・ゴス宅で交流を続けた。コスモポリタンなジェイムズは、土着気質のハーディとは馬が合わなかったようだ。正反対の二人ではあるが世紀末から世紀の変わり目における問題意識を共有していたと考えられる。ゴシック、女性観、職業観、創作作法について、社会が激しく変化しつつあるときに、二人の作家はどのようなとらえ方をしていたのかをこのシンポジウムでは見てゆく。

ヘンリー・ジェイムズの怪奇小説における喪失：ハーディとの比較のために

宮澤 優樹

ヘンリー・ジェイムズの怪奇小説は、幽霊の目撃という超自然的な出来事を表面的には扱いながら、その内実においてはより複雑な心理的・現象学的経験を主題とすることが、しばしば指摘されてきた。本発表はその前提に立ちながら、「にぎやかな街角」(“The Jolly Corner,” 1908) を軸として、ジェイムズの書く幽霊が喪失の体験をいかに物語として造形しているかを検討する。主人公スペンサー・ブライドンが見つめる幽霊のような幻影は、急速に都市化するニューヨークを背景に、若かった頃アメリカに留まっていればあり得たであろうもう一人の自分、すなわち選ばれることなく、ついに生きられることのなかった自己である。現実には一度も所有したことがないにもかかわらず、彼はそれを喪失として悼む。この逆説が際立たせるものを、ジェイムズが怪奇小説の中で描

く喪失の特質の一つとして考察したい。喪失は、トマス・ハーディもまた小説や詩作品において取り組んだ題材でもある。変化しゆく社会を背景とした仮想によって作られるジェイムズの逆説的な喪失と、ハーディの描く喪失とを対照させることによって、両者を比較するための一つの視点を示したい。

世紀転換期のジェイムズと「新しい女」

松浦 恵美

ヘンリー・ジェイムズは多彩なヒロインや女性登場人物を描いたことで広く知られている。彼が作家活動を行った 19 世紀後半から 20 世紀初頭は、女性の社会的地位に大きな変化が起こる中で「新しい女」が登場した時期に重なる。しかし、世紀転換期のジェイムズ作品には、むしろ「新しい女」の定義に沿わない女性が多くみられる。また、当時の「新しい女」が政治的な権利や社会的地位の向上を求めたのに対し、ジェイムズの女性登場人物たちが直面し、あるいは求めるのは、必ずしもそうした現実の社会における変化とは言えない。批評家のマーサ・バンタは、現実の「新しい女」に対するジェイムズの関心の不足を指摘するが、ではジェイムズの「新しい女」に対する姿勢はどのようなものだったのだろうか。本発表では、『ポイントンの蒐集品』(1897)、『檻の中』(1898)、『ねじの回転』(1898)などのテキストや、20 世紀初頭の女性参政権運動に対するジェイムズの反応を中心に、世紀転換期のジェイムズの女性表象を再検討する。同

時に、同時期のハーディ作品における女性登場人物を参照し、「新しい女」に対するジェイムズとハーディの姿勢の差異についても考察を試みる。

ハーディとジェイムズにおける「芸術家小説」(Künstlerroman)：

プロフェッションとしての彫刻家

杉村 醇子

本発表では、トマス・ハーディの『恋の霊』を芸術家小説(Künstlerroman)の視点で読み直す。本作再評価の立役者の一人ヒリス・ミラーは1970年代に『恋の霊』を、芸術について書かれた19世紀小説のうち最も重要な作品の一つと高く評価した。しかし芸術家小説が19世紀後半に英語圏文壇で隆盛を極めたにもかかわらず、本ジャンルの枠組みを手がかりに読み解く研究は多くないように思われる。そのため初めにモーリス・ビービの *Ivory Towers and Sacred Founts* 等、主要先行研究を参照しつつ『恋の霊』のジャンル面における類似と逸脱を検討する。次に世代を超えて理想美を追求するジョスリン・ピアストンの人物像を、ヴィクトリア朝の職業芸術家の誕生という文脈で考察する。ハーディ作品の中で例外的に社会的成功を享受するピアストンの姿を、エドモンド・ゴスが提唱した New Sculpture 運動も視野に入れつつ、「プロフェッションとしての彫刻家」という視点から再考したい。その際、『ロデリック・ハドソン』をはじめとして芸術家の生を多様に描いたヘンリー・ジェイムズの作品と対照化することにもなる

だろう。これらの作業を通じて、世紀末の英語圏における芸術家小説の新たな一面を示すことが本発表の目的である。

「語りえないもの」をいかに語るか

——ハーディとジェイムズにおける語りの機能とリアリズムの射程——

麻島 徳子

本発表は、トマス・ハーディとヘンリー・ジェイムズの小説を並べて読むとき、両者を単なる telling と showing の対立や、ヴィクトリア朝リアリズムとモダニズムの対比として整理するだけでは捉えきれない論点があるのではないかという問題意識から出発する。こうした枠組みを再検討する視座として、本発表ではウェイン・ブースの語りの理論に依拠し、語りの技法を優劣ではなく、作品が特定の効果を達成するために選択される修辞的手段として捉える。

この視座の妥当性を検討するため、『ダーバヴィル家のテス』(1891)と『ある婦人の肖像』(1881)を取り上げる。ハーディは語り手の介入的・説明的語りによって出来事の因果関係を明示し、ジェイムズは語りの抑制と視点の限定によって意味の確定を読者に委ねるという対照的手法を用いる。しかしこの差異は単なる様式の違いではなく、個人の過酷な経験や内面をいかにリアリズムの枠内で物語として成立させるかという要請に応じて選択されたものと考えられる。

両者はいずれも、時間の不可逆性や行為の結果責任といったリアリズム小説の基本条件を前提としており、その意味でリアリズムの枠組み自体を逸脱するものではない。むしろその枠内で、語りの過剰と抑制という異なる方法を通して、リアリズム小説がいかに経験を構成しうるかを示している。

本発表は、この語りの差異そのものがリアリズム小説の射程を規定している点に注目し、その差異を 19 世紀後半のリアリズム小説における語りの変化を考えるための一つの視座として提示することで、リアリズム小説の成立条件と限界について多角的な討議に資することを目的とする。

《特別講演概要》

人の家を見に行く習慣

新井 潤美

トマス・ハーディの小説 *The Hand of Ethelberta: A Comedy in Chapters* (1876 年) では、若い未亡人であるエセルバータが、ネイという資産家の男性に結婚を申し込まれ、答えを保留にしたまま、人目につかないように、夜にこっそり彼の田舎の邸宅を偵察に行き、それが期待どおりでないことがっかりする。しかも、屋敷を見に行ったことがネイにばれてしまう。ネイは、相手がわざわざ自分の家を見にきたことを良い兆候と期待しながらも、相手の行為を半ば軽蔑せざるを得ない。このエピソードは、この小説が

書かれた 60 年以上前に出版された別の作品の中のエピソードを連想させるかもしれない。ジェイン・オースティンの *Pride and Prejudice* (1813 年) ではヒロインのエリザベスが、自分に結婚の申し込みをした（そしてきっぱりと断った）ダーシーの邸宅のペンバリーを、彼が不在だと聞いて見に行くが、予定よりも一日早く帰宅したダーシーと鉢合わせして、相手にどう思われるだろうかと恥入り、動揺するのである。

実際、エリザベスがペンバリーを見に行ってこの邸宅の規模と、富の蓄積を目のあたりにしたことによって、ダーシーを再評価したのだという、シニカルな見方もある。そして、一度プロポーズを断った相手の自宅を、理由がなんであれ、わざわざ見に行くのはあまり感心すべき行動とは言えないかもしれない。プロポーズを受けた相手の屋敷を、主人が不在のときにこっそりと見に行くという行為は、相手を値踏みする、浅ましい行為と解釈されても仕方がないわけで、*Pride and Prejudice* の注釈付きの版ではこのエピソードに関して、「当時は人のお屋敷を見に行く習慣は一般的だった」といった説明がわざわざつけられていることもある。

本発表では「人の家を見に行く」という行為がオースティンの時代からハーディの時代、そしてその後の時代にかけて、どのように、どんな階級の人々の間に広まっていったのか、その変遷と発展を、いくつかの文学作品の例に目を向けながら辿ってみたい。